八犬傳九輯下帙下編之上拙評

下

イ 曾 日
600
7675

早稲田大學圖書

よしありてなにがしのまうしてんのぞうくにほうしの名
にかよふハ義仲にそハ何となくふさなりけるできめい
ぼうずの名いふもふさなりし或ハそのころの忠もある
これもちろん評するにあたらず筆ついでにおもひまかせぬ
○つまり助をといふの城へにかの様あしの中にかくしおくの
二三さいの船をつくりて用ありそのおくのさまといへどもおこたり
なびあげざるよしつらくらいにてきをさゝげせたるか
かやのもりのまいなんかめずらしからぬなど折々ところ
に一日さまりよし八月にハ定ざるなかのばてもぎ
やうとくぐちになりし人と荘今小文岳のうへをおもへ

イ 曽 600 76

るそてせんさうなる人いそがしくよしやさば時日まではお
もひつゞるぬもあらんなれどその時日をまつけさやら
そのみならずさきぶん大てきまかさるれさやしさいふ
よみふにつけて又二人の人をおすゝ犬士のそんざや
そくぎのこゝろをかりてつせのあしおもふしもさきま
するをなすふてよのそきハかしこハ八百八人のぬきく十分に
そくみてありさつせしもまろさだめてありあんだおもふ
までまもおもんざてきやしくとろことハさつせうよさだ
めがゝしぐふいろなるやとあんじもまべしさればこのまゝ今
次年のそろあり犬川と犬田とかしこしつらんきおもしろん

ざよもあらじとうつおちゐてもおもふべし此おのれが例の
たゞ言ようるさくそちこくうふほどまでをそあるれしう
そこまではハはらぬさいづれらなるぞ何ぶんもぬて
よあのもハおすゝりひとりかしこぶろよあらさてさせでは
犬飼とらじんふしてとハひとり信乃が智をほろう
ざるのこゝろの言をそぞくせらぬこゝのことふだるな
言まで此けいぎのぶん中ちぜんは秋八まもあそび
そしぬるて ○ 城中をあぎいゑまちくぶろうとも
さあるべくこきさそげ兵てけつぎハいふもこきこゝ
えもせそうを憑ッしてたちけつうくつてまいの車

みかたとなさバ大たいをひきおこし信乃が火牛のはかく
もおこなひがたきはいふまじきにあらずあやふかり
しかふあやふからぬ縦し陣中に於犬士あらバ何とか
又たりなきところありて二犬とてもじ合せふどしてかたみと
ときてさとをかずのたるふたえべきかたききたけれはその
たかるところそにまされどそききたけ犬士をよくたへかる
今かきるにたちけいろぞとも智勇とらひ寅助と
いひよふいは毛山をおとされまじきをたへかるよう
てまづみかけら兵粮をおかりんごのさうかをそ
へんとえ志かして犯とへぎにようんのあそびもあるべし

おほいなる犬士城にありとも志かしてのちなるところのこるし
下ハともかくさしあたりてのところハ此老と同じかるべき
か此老の今日のけいぎあるそてぬところいかふもうしろ
又の老臣たるのくわをはぐるといへるんか○
村さるが牛をきよしとりふにとききさけがたるぶじなんほ
どハなからんまて又あさへはこふいかふとさしつまりたる
るちぞさるおほえんそぬかりそききふあの君のよ
まちしにそむやらうのへんあるるに又えうりきとるる
ぬ計に此さしつらへとくてむやしさるくあくでかく一
つくづくあるやせてそのせいきの花をいよくまさせられ

よる一ぜん寒さのころまであそびてハいろでら梅香の
たぐひをとつて来るあんやとら曲折よくやゝぬひとこ
ひつじハそこにふくさみにひくる康ハさきやとたづぬる
たよひあるとてもふくさみにいくひきるかくれ又ひつじを
し此方にあるものをそこびの用にあるものふくさ
さなぎつくりて見るものいづるところあるさればまつくろ
角あるものとこそききけるきこえしてたづねけりん
あるいはめくさつまりてこじりんほどおそふて又手も
ぞういにきりてくて何とやんとさんにあそう谷の
めく牛より外に角あるものも此よにかもあつてもあれど

さるにごほきものを此ぶりまていふべきかそれやまひつ
じと康のふところのこそその二物も谷より入めくる用
にハありがくしそのあるごときものをえも今あるる
ゑしかもバ火牛にかゆるものをその用ハさておき角
ありてまころものまでもあつざればまことにえんとよろ
しこゑし此あるにさきと十あるに又つなるでがいこのゆゑ
あるかふの山をかしてにかのるに長きまで牛に
まさるものやゝぞうのみのえてをあさあるをいざるふと
やいさん野奇とゑいさんつあくこきてめくりくことを
二十餘年あよりのふくろくまてあるりよりさえてりく

めいきやう北方にすむ虎をとらへるをもつて
三ゑまであまねくるぬも女ちろえなれども犬とん
ちやうんつきしる火牛のかたちをみのもつて見れ
ときこゝろそのいんあるの女ちらみそのふくせんと
おゝ韓子のところは仁義の教子の一子に子すを
みて猿の用あらんふどゝは加の芝しきを小児ころを
よもちるまでとおもろてふせおきふどさそびて
虎よろもどゝうその好みてでんきるきやうにおのれは
かんふく一見ざるをみのそのきざちと女ちとまざ
ふうとむそうにみ人もあるふるはいきゆるぐちう

ろうくげんきやうの筆上の好世界の事ぞ犬ひを
ちうめこおんきよしせらめはよそあかくまれ好世界の
みのきそは牛角にくてたのまろをつくるに好るす
ぐあひの好ある三うをおそるべしおのれまひめくらぐち
へきあれどられにおかきてはりのむそろよいてる人とて
ろうこともろくてくもめてまぜやつさてよいの
いきでのちゑぶる北めをおそれつきて又ふる
ありるいまつをつけんにハ左にてふかのせらひよらへども
ぞつハみのきぞよろも鹿の角くつてようらん又鹿
たゆまずのあく猿ぞも神助ぞんぞ用をふさずるに

又おやじきよが似作者も千に一つも無葉をおもひ
ゆゑんは八つふくざ康をつくふにあるんそれはそれ
作あくだざあらん亭と名あらん今るみなおもて
のいぐさいをいぐさいのきざらつを名をばそくげんは
いふるまへくおきとてえくるものふげんさく
ならは六ろみておもひよるまぢきみなもてを大手の
かたりてきてを角よとえくれぐもきあん
ふあんとんもそのあしもとつめのさきまでよう
けんやめくめも康いかでも手のつくそふのさき
それでハおもろくざてとふるまでもチヤンと

又おくに到八に三そいきやておゐくふどそのかれお
ちとさきとところ又好之好之○多波岳信がみの
ものよりぐりよりそをひきまで出あるまでのとと
ろ出よおもての好きでにおもいたをバおよくぐろとお
ふていふまであくぎてそまて人あれてあるふどさ
らにまちふるもそつけふくざきぜんの大ここびおすふ
きありかちえ出りんありて伏姉卯堂又まりし
てんのくてきなきけの名てありくんほどゑ文外
にてまりきくあていとたふとくまりし天河原ぢつあ
らん京好ものちこゑみ作名たるんまもるあるそいと

おもふべし。おほいなるべきをもしらしみのたまう
ぞうして牙の角にかゆるあるのこふ・だて軍神と
せしさるまうし天のがざうなされそうび・の目に
かんじんそへよくかつてめでたし河原のてうその
ちづのくさとめ本輯中のあいきやうされとみちぎめ
一つとらへぞうくべし ○兵狼のるすにはそでにさだめて
あり今又両士の一千五百名ときをけさきなはきこの
言にあれど些一千五百はそれとハことえがふてすてハ
よみそのいとひはきそけも些るすなしとハお
まふべうぞよみちのさいつらきるるころあげま

きといへどもぼんなるぞたゞそのきあるところしぜん
とあざなひあり侯乃ぞうしてまさの助にいそはやそ
おきて二つをおさしむるかせひのるすのそへはもちろん
兵狼のそへたくましくいさぎよし火牛そのせう
とハさんれど将せしぶハいそゆるはめでたくなぐとし
かしこうするなるぞしてやぶれにおよぞで兵狼あり
とても侯にかなはんもく岡山にそなへべきのいくさに
あるぞ火牛をもて車をやき死生なきのたゝかひ
しててきをなぶるにハ兵狼さへなきさ・士卒の気
をはぢむるにもあるべしかのおくに両家

のあまりさるあり首をとらんとらんとよへてこそ
とも其いおんどくをくべしされどもよみちこそよ御意へ
やぶれあぞふ司の御かうとまでをとらふ事もあらじたる
つまりあればてきの兵粮をかりのこすまでまてよきうかへ
さらのぐあひをうまいものもろくはげかり天まひらく
バお伴ありてのそれをてひつかうかしおすあつし首を
とるのはそれの死生のだんよしいま主君の御馬を
ころんやおま信ながいふところ四万八お寒くまたらで
たゞ車とありおそろしおハ車のところをとくぐさで
してハかるがしさるゆゑまた首をとるうちてうも

女しそのさくらひちがえでをいつりさく勝て車ぶふ
やきくでころぞ四万のてきハやぶるゝやさしと　えうり
さだめてあらよりてげかりをあひづの御馬をとらふく
加勢とおし兵粮とおし牛をもとめ御馬をとらず
るすやしえいをそえる事信ながそれちからはありともふ
べしそれの力きもも白とくび合るとあひてゐるして
おすらきえんるのるふかいふもめぐし○とききけ
両せんをそえるひてまの井よつぎそれしを郡中のたまはり
とせしてつかえまるもうとさもあんぎるすましてつぎ
ま暑ふう三方まとめてうちすまし此二人をひらる

まさにつゞかし何ら何までちからぞしぬる ○信乃
がみのちをかけて主君の仁德伏姫のめしざよをいひ
現八ハとせにさゝきとらやまをとゞまるそうしてとぶ
やそらおよそきさらけもろふをいひ今二人ハちかいし
ちやをたふさてろあみそあくのやくそくきらめどもろ
いよゝある老兵までみなかゞろまめのかとるまあてちをとを
つれろそいよゝあるハさそふくこあらまでせいさいつく
さまゝあふ二犬陣中法令ただしくべりんばかふいる
あるものあらでハみぞらはそのだしよくをちかる
べくさてさらさてハせつさらく 信乃が猪にむかひ

てうさらさてこゝろざしふかきちていんありてきてふさらさひ
用をつ又わとうふしくおもふまつきてハそのやあれたふれ
んすあくかゞめあそふみをしむおもひあるところでせやン
よわちあしそもこれ言仁あろあいあろあんある
義ある今山よりきてへきてある猪なりとてこれは
かんだおうぜざらんやましてやりんある孝霊のあん
まちといのちのなんだうぶづくべくゆゑとさらみも
さぞしそがりく ○信乃現八ハどうぞてこゞのまハ
直えちやなほまうさそろる犬士すてかくらでやそ
又此るをとろて君うえでやえかくるそく ○ほろ

のちやせんぞうのちくとくしいせんハ中にあるを
ちなどそのおもしろさおしあるをいそでハなかなかに
あるをバ二三を狂ふくめのふさハがいまもよ信乃が
三との言出大戦中ぞこそでハむきびあるなんとまでハ
あひたうそれどその狂言京にあるそて出さるさひ
中にらふるぞるる末べくハあれどいうやうのかちあひ
によりてのむきびとハかとろそうろべき大ぞでハある
ざれど狂いふにえんとうのつけぞくのこともひろ
そハ狂哥さきにさる五郎と法中のあやふきを代筆
よそけうろこに又狂言あゆふきありて信のがたき

くるのるをあるじするぞうてハなのむきびはともりんさ
うあるざらにほうせいぞいも三役りんさいしてそこ
とハうれにかぎるぞ著翁の好菓をそべていふやうに
あざるあるをどきうとそハ又いぞらいふうふうれまで
かのそうそらいそのむにおよぞぞうの子とちなそみ
てきをみふぞろしすて卯をゆづるんのちう言まこと
にまうりむきべりおもろいうふきあるうふほうのまん
ぎ馬のゆうあいあしとももあるし出あつき、をかくまで
にあつく呑つくされたる筆のまことハいふくあつし
かれ三十しやせざるんやけいふくせざるんや狂言狂哥ハかちろ

ん房八ぬしさんのいくさには美名をあらはして　信乃が忠
んぎやうふさ八がまことにさらには又いふぞろうしよろこび
おすへうんと諸又おなみまひにかへつてかん表にはうば
ふてこちもさふりかのちつきおあさぎぬを給んらに
をさあおきぼろつまとハ名をそでもゑんぎゑんぎやう
かくまでゑんぎやうのをさあまの給んらに信乃がふと
ころにはあんとハ又四輯いらひ出ひさびまのふくろ
まノナヤシとをさあてあふんとハいふしてもゑんくぬすと
かんふくこかの忠ゑくぐほはおどろくやしよのさらし人
のるそハ何のるやあてそ　おえおぐがえつらるど

に輯はあるるとあれがおそらく此むすびのるすも
やあうんさんぶその人これをつたへさうしぐほやしおもて
今さうはおくはこゝろもそなへべきことそハとまれかく
まれあさあさぎぬ玖八があほどあるまたも又やく
そくまでの病中玖八がころそつくしゝらほうたん
そのうみさしぜんはおもえれて感ふくろ柳さて玖八が
ちゝおくゆんをそのそりそひむとやもひと日のみ
がひの言しれもそれはは感ぜる玖隆が京のぼり
ころよして八たびどしゆ此このちあやられしまハあらぬ
うきおもろゝまでの女に女ちん之さうとてハ好筆ぬ

ぬしさへ又せのぶいえも兼ともに此馬をひきまわし
るゞさいぐさいの縁ありてそれを又いぐさいの馬ぬしに
人志らしてそれがおくのもとをほとくくさいのぬしが
あひ一人一まゐ一きてもいぐさいつよくおそはよ
く寄そーかんざやーのところ叔ゑ様ぬかつぶっコロが
馬をゆるが主はなれどその馬をひきすてまつ信乃
まさ客とていふなぬきみくめぐらく初シテ後シテ
いづれもこころのぬしにもちろみもち今そのぬしふ
べきこそ桑もなし ただ俗にひくくアくおもしろく
信乃おどろきをもつ○はそさあてそれなるからぞ

いづつ又ゆくへをやんさくやんとげふ此ところそのる
をともやうく智ひらふて旅るべきこころはあらぬやもち
ろんなれどふまづひはとくいておよそぞはてそその
よまハ千言らふをも同じくら言ろあまづひはを
つるふどくらいて口つまとことをいうものはつらずる信乃之
信乃之犬士を啓ることいつことそも一分一厘くるしハ
そーしせいめうく○信乃がいぞるち何ことありそく
あることろをかつとぬハ信乃のをかきてハ一人の大おめく
されバとて釈ハハおよくそーくかりてある甚又ることかく
べきあーぎそうくで此でゝく さーあくらしくるほどと馬

弓矢のことにて男さびしもあらん男らしてあり
てその文勢おのづから信乃が今日をとゞめを
いでたりんさみくそしあらずめし　れてまうふめい
でしたべらぞを男をせらめし　おのかきさへまいのチヤ
ことわらそてありたてがきさまへのよせてそとおそれぞ
車の下にくゞりとり又たせいでりんまへせいりのと
きさとまて言ようあづきてゆらまくほうやうその
よめをたなちうみけるいきほひさてそと火勢ぞ
せひみるごとくせうぶいらふぞハもいめさだまる言葉
えやうちいくさとんじよくいとうさるしきぶんぎうん

百六十六回

妙真のおどろきしもやながらうらみのまあらだてきを
つらしてまよひおとゝ妙きさにそてゆゐんの旅ぶりはあら
るのまぜんのつゞふりに立合よしあきら定たゞあのめく
犬士をかろんぜそばそまひおとゝ妙きさを又阿やにまてゆ
ぜんさせまじきを見ずるに北岡山より見つあてこちらの
名るとおもひろせんをやとまてかゝみられバらくゆぜん
まおよびしるるれ智ある似てそんちあらざる信乃
がおそれざるところ○たんせうぶくろぬくて小石を
おぐへしせらきいつよくぬきかの火牛よりも此火猪ハ又一段

用おもく車をやくのせん用あれバえんせうをそつれ
て投あげらるゝ小石をまじへさりとハぬくそゞけるきさ
くかんけんこゝしきたちたるはいまつさんらんして車にも
えうつるもみろべしかの火手とるハ同じくして其の用
ハ又同じなれバさればハ牛角にたしかにゆひつけて火器
とともふろけそしらんよう車上車下にさんらんさうを
やくの用にハよしとふべしそろそれバぎこかくようもるふ
してハちよがまさあつをいそいふべしいずれもるみ
さんらんしてハかつるもきんえくの一句とふべし於まる
みるをたさそけてまんちくかうみちての事るきの

うふつきてさそみしふれバかうそもかゝえべく於さてにハ
ことごくまうらし天がしさてあふるんろさんれバちんごう
ハ大名こゝろきまもあろんろ春うし信のがこゝとも二言もあれ
バそんぎそしもあつてそを依とろむそぶにるのさいめう
なぶるに又用あるろもひのいぐさい大名ここれらしく
あるそさすゝほうにいづれのるれしきあるとらへず
いふをもえろべし ○ 於昔ハ八日までそこぼくちう
又そひあひをえせをるるて於いのこふるんや朝れき
むく又よせてそえて凡下ふど八人のこあふぎ八百のせ
いをそひろさそふそちかしことぞくせいを合さくの

よろをつくべきに此季の方角あしきとハ知らねバ北風
かくしまて東南の風かりはまづふろきうちろほどなく
次韓信やんちんいバ見て其の智く何やらや今ひあひ
のせいめーを見らんと絡し從ーきさきとうことく
べきもて速らう吹きまの風東南のまでもろのまそ
もとは天狗んの吹ろふろならバ知のあくろのくこ
まてくるまでハ吹きにおよそぬ理もあるんらさればこ
ハちぶ天狗んの韓風冬をあげしく吹あひすバすハん
の功を成させまてよろしきをかの奇玉の風をとうこま
でもひきつけてかまかくおもひいさんやせてまし

てふらくの事のそこをひまふるまもあるんか○ふそ
ぞりーけるぞ二士のうちだ孝は白石がとてのそく智ふ
どささそがは人あるもおのふきあり他作あバ身ぎの
うけたるのきやーてきんきやーてき此陣ハ然まてそ
ちいそーせんらそをおひころまても二犬が高つえてざるは
もあるざれどかーし耳ーて大勢と小勢とありつやんまふ
かきそてるふとやぶりをーきるまて二犬の勇いふよく死
ありろのあき定車ハやうあてさーもの大軍於三方
あるは此まてまげ見まひまてハあまりまるそーしことふ
まげ見まふてハさらせんみ明らとおべーし此一日は三方

太せんらくぢやくがくえんしよゐぐ先久しかりて
ころまでも三ゐのまとゐにめぐる一切の大せんハまことふ
花てしまりつきよく大せん成すろーでも成すろし
○よみちつききみけをみてやぐらのぼりえんそこときま
けるをそよーいーてそくーごみちからじんさせるてかぞ
あろうまへのてらがんどけいこうやくふかるあひつまよう
大わらぞくらんいをこふつの本陣さこそいふるしく
うひじんとふひ於させるこその花見ぞめすまさん
てみろまでみろいさあり○女のこのすのみをこあや
ふくえゆかのちーしん又あさへよおどろかきばよし

みちすーてあんざおべきやうきこえけがことをもちひぎ
ろとせをぶりあるせつをも千萬ころそのうそ二男あり
義ありあんありてげふも三世の良わなかかむしきをけ
がいまむこころも又い系も老臣まそいそあるだいじ
をふミてのねてころう之但しろうまのりておへりとえ
二犬の今ろのせんいをそつぶろはまろおどもそのあやふき
まのぞむをいさむるまへろふつきてかくもいふべきいそほ
ひあり二犬のふのけのそてちうひちぐ車をやきてきを
ちらしてかろみをとうんとのこのいあろんや車のおそる
べきをとやきくぐこそてきこともやぶりわをうへくらちをを

あさんよのたゝかひにえらう大軍をおそれおめおそぞ
そのらうぜいそのきうにぞやうじておひせまうすでば
いうぞうぜんうゝをふさぎのるあるんてまくにあうて
おすぶごく たやすくうちごく大せんにあうものみ
あやふしとつぶるはつゐるはさゝさぐるに大軍をてきふも
勇あるぞくあやまりてせちあひしくてあたふてふん
ぎにおよべるにあうざるはうまでそりおぞうきさきけが
言のいさほひによりてそこの言あるのゑ未だだめに
まいのちやそくの旅を長くさ陣一矢し○そき
さけらいさあらほさでそのいにまうしうるあしうのよ

こゝきやうちんどよしみちのけつせん何やらいふもぜ
ひはおよきぬいまほひくろそのあやふきておよどそ
あやふきハてきはむかひてくるふくバをつちもちさい
とうぞてあやふしといふはあつぎてされバよしみもがりつん
ぜひにおよぞるバそのあやふきはのぞあどもつえきおし
へんそのせうそのはようてそかくてあやふきはハいくさし
めどよのいふろはあるべしむつそひとえてそうんはハ老臣
そきさそけとこひいうそとくるをせひにおよぞどぞ
さうてあんや君も文筆ついでそきさきけがたきみ
毎ぞくに傳再矢しくちうして長尾のきこえてき

にあやまりてあり老兵の言あてなりくそこぞ
物のあんきおゝんとまかくもあ要きまいてこうそあめざる
さるぞちんぶるうけたるかきやゆしときまけすそこん
あくりぶるくふんせんにおとびくるるてそまことふ
ぜひにおよぶぬところにかくのめく三方一方一せう一
さい一智一勇をあくほどりあやぶりまくぞう
他作のごとくかちろさハたゞちかうけるハひくところ
まくるのこふる兵法らふをかるやうのいくさあ致るぬ
ハつまでもそくそのさむでなれども私いろふもうまぞ
あすしろし○うけたるうるは都あそれる御のいくさい

とも意外之此人ちゝふぞこばうとあるぶおいづれ
何ぞのちよせやらあるのるあんとまではゝれも目をとめ
あけどころはあんとハまことはいきやうにおもむき思ふけ
さるがその元ておもひえりてあるに此人東國の一かんゆう
くるてよりおすみハきこえてあるあれどもほかしれて
ぐちゝめてすれバえくるところ又その子のすみをちのむや
おくぶどくるそのきこえむねーくるぞる貫目まづ又て
お現一じんれぎえゝもちろよりみせあくひじんとぞん
ぐるひのきやうてきまうけあえさおそうこよおすへバ
よみちが條館の二大ともふあき定をやぶるまで

花ハあるなれどそれ〳〵本陣にそのこゝろづけよう
かなりぞさあるべきことゝ又あのゝえてあるこゝろなれバ
むかハむかふのめづらしとまでのそのかくれうぞしこゝ
ろをこゝろつけほかの此まゝとしてきまでろくぞせつ外
の取扱たらつぐ此ところにてそのまゝしてきたをやぶる
まて二人の花ハいふまでぞよもみちが花又あのおを
ひのほかのこゝろにさきにてあまつかれかくともふかし
いふもきあるあやどうあるかいづこそのはしはめ
やうながさてあすえしかんけんと他作あるんにハ云てそ
ふかにふあの園へよせあるふどとまかくべきたささるを

さうほしこゝろふかいの都合にせめてくるゝなれでおそくては
何やかやにもやうあるの思慮なるハもとよりなれど秋
かのふかにゆき会ひてつゐでこゝろとあらひあるが故言
ぎるせまうち会にてあすところこともおりふしもいくだい
まさりてめでたし〳〵○よみそのそこへきあくまけて
あきのとあやふきまでなる長尾のせうないそんでおれ
かるハせちろんにて此寒寺も外の取扱たらつぐの
二株花をうつるにさうやんとてあるべし又此大げしきに
いつくぞてハあげまきの大おみづうるもとくでくるも
あるざべしおくのしあかげもそげしきによりてのいき

ほひハあのづきうじきがなんぞが勇ハやりまてうせ
よしみちが武ハ弓ニ又せられたる人ぐゝのところもち
ろんおすゝしよりへあそん三と地許もいよく花を
そへられたりげふかみのあそんの弓終のよしなんよろかく
べつふるすハいふまでもなく此ところのさる奥州の
七騎落の時のたるきにほゝほうてたり○たるぐ
がありてましくまさんざふあざこハるてまもなで
いさんざことて去いくさいの一もれ此めさよしハ和にま
こゝあるごとくいまだ何もまゐれど此もれあるて
ぶそれよと今まではいさゝろみおいまくるてまも何う

立りあがりそのげふさぬよし何のいくさいなればちらぐ
に次輯をみんふぞ又大きにちがふてあるまじ何ぬで
そハともかくもまて川いらい諸犬ハもちろん諸犬あい集
いたるとむにかけたるありて〻の此方の花としきよみ
ちがたの安心此人の家々のあはれまことにゆかるさいの
おそなりけり又同じやうに子やけのぞ正木大全なりぐ
に里見ゆかりの土をたりあそせ地をうせいぐさい一のあ
犬士たちぐらひすゝのをぞんじよろあるさこう・去あらん
させことまでまづ政ニ房にまずゑるせ里見ニ一功ある
せ犬士とゆうるにニ安房へいたるべきあらんとまでに

しそかのそのあくろの恩候まいつうしめくしてんかくし
てまひ犬士のそひおのすやぞそこによみちあや
ふきだんそのこさものちからをみてろうぜんと
おもうろてさしものきなしてきをふせぎさそふの
大功これまで里見は父なる大花ありて犬士のそひ
ものあるぞ又一人のえひりろ正木大全さればとて又
一トものすてもあるぞかの親兵衛とおちあうてともに
功をふさてそのくまのいんえんきめるのむすめにあ
親兵衛とともに功をふさてがせとうろたろつぐがほん
いのところ親兵衛又たろつぐがこころはむなするふし

此二人こそはふひはおち合あそびててきをやぶるとは
まことにまれなるめぐくろの又正木をおさめてところ
よろのふくろうさいざいむすびかんせんやすろ鬼忍
かんふくせずんばやくさしく玉んしめぐろく親たろ
ぐせのあいをかねるようにして里見はきこゆべきはまづる
こころはさだめてあれどいまだ里見はつろへはあるぞつ
くへあるざれどもこころさえではきしてあればこころよみ
ちをささふべきはせとうくされどつくへざればころはん
とはなして犬士とたすけて犬士のるをさそふものは
あればさふかちるのこころかくのめしぎろふんめう

せいとく○義経がひろまさまこゝろみてようてとかき
おされたる然二ゆへのことはあるハいづれかつ人物のふい
あるを一人ハうつぜん一人ハみちゆきはり同どくべうぬハ
もとようらふまでそれども強みかうこけおもろーたる
つぐのうつぜんハうつぜんいよくおもろー義経うつぜんたる
んまハそのうつぜんハふいあれども学得よろーて義経ハ
いづれ然たるひちーまでぞへハあるまであるんと人見お
もろくおもひてあるなれバあどころのふいこゝろあれ
そのあるハさてこそふとおもひその本べき道まで　もーぜも
きれてあるくさみが義経ハうつぜんまぜらおざる文いふく

おやろーことところそのうちに馬のるみのぬきさへあるとや
馬のやまひにてとちーのちくひおすふきふらし　義経
みやこのさいやくをのがれくるなれバ代々の弟がりふ實
いそがぞそてハあくぞちがんもちろんいそぐべくみちを
だいしておそくるべきがあくりまへて又おみつるよ
義経が小口をみろうえやいそがれてそれものまゝ
とおすえるころハ代々所よりいくだいしこゝろこゝ
ろをちてとて馬のるもどとまえでくなあどさうとてハ
ちくぬ日ふとといひふが今だいどのうつせんありてよ
みちあゆみくたらつゞかおてきそくふてみるのまとつる

もジレツタ手を放ちて馬のたづなをとりそのかはり
いそぎみさきんのそばよりやんでんぎどく そぶが
ごとくあるその花のさかやかいくだものたえあつて
そのめかくぐつくかとどいふともあるごあちこちは
まことはおのふきふくきあくんくう前月のはすつ
らきまみちといそがせては此八日のところのくひあひ
はふつかの日ころもあるべし何ぶん此所は海のかよ
えあを一トひろちかやらあてるめとあすべし ○馬の
るまへまいりてあく走ちちのためのところへ走帆を
ぐあひよくもひそびきまたあれふ 此馬とるそて

ひきうけんには青海はの上にはいろいろまじりかれどもまた
おとなしやとも走りさしまり上にはさぞとも並ぶ女のあれては
せいぶんその走んそくぶつぼあつぞみたるをほまれ
その走んの高下はともかく青海はは昼よりちるへるく
されはまさかとの情へし之られてそのくちおいやまで
走れど二の町にあつては走も虎殿といふの功図をやぶ
るのたてつきをたえふくあつては走しるべしさりなぐ
らにやさふあて主のあいせきをけいりんあら地に出
やくぜんとところをほかつはあるとさらそひとつふべき
それはそりの此ところはいまでに走あるるをつぐ下筆

のゆきで分てらぬも言るかなりけるぶさとるべきの
ぞほきさしくなれどもむろん紀州んの何ぞやしとう
いふ女のたまひしふみあてあるは銘々ごとく
青柳はのだらんみやこまでかをほとあらまそて其の
主の功をたまひ今ぐらまべき時来りてぐらやめし
一疋の馬を二疋にして用をべんずるをみて又もと
の一疋にせられしままにことはりなきずんば仙人の
紙馬の術もおよびがたくなからしくころうを
おもひあはせみるに其日をかさねうづむるも礼に
よりてそのあいまんをうつししる奴三保が御の仁なる

も今さらいふまでもなけれど徳のある事はおよばぬ事に
仁うまはあつきの臣ついしゆてその美いふべからし
代明帝は富山にてそのすをえらびし代明帝がまことの故で
志るべきにあらぬは女ともうけあてあるなぶらふとまい
あらざるはもちろんなれどもそれにたぐふる馬をとゞめ
しかあるをおしはかるぞそのすゑのみをもとむべ
きもろこしとふまでかのところとそほくついてあると
おのづからまなぶの筆にあらぬべし犬馬をとゞむ
の礼をぞこえきあるまでめの地名もよきをと
ちるみまそもこのあきるまじきなし

○伏姫神霊の

ゆあはきじやうえんぎりふまでゐてつるあるが如く
りうさ崎をむすびてみなろうし諸大名轄さいで
てらまんのまあつて大角もまでまはまあびけらう
說教もまなびはぎうんやろしまさのちんぎまはて
さぐはせんぎ河はそのりんその用なえきらあえき
その地そのしふぎやら華さうとハかけん〳〵むちう
ちんぎやとハいひぎら水郷をさしも山まさ山の
木曽路まてとハ峰とみすろきすくそみし依那盃
びさまそあられどゆあのうちそのも於ぎら文はハ
かとぎで說教ぎがはきよ文まやられりふまで

もあるど於おのふきふりし ○ ふえのよのどの
のしなんどもそてるとやまありうてよう千住河はい
しうまでのそころそのゆくぎそのあんいをそろう如う
さをのそくちのきらひ方金二三斤かの辻堂の信乃
まつをるせいさひちんえんのちろるもあまつるも
の峰ふどくさぐのあすふまあるのあすろき於まら
ちんくんまて一トくみあく人をかなそるを閑まてる
まそ山路はまりひちんやくうゑつあいせうどさ文
ねを於いふあくるまはつぎささてうむうよある
於るはん伯あらぎ昨日のおくれ說之信がむいうち

かんなされてくだされいそぎいてあつらへまでまゐら
すゝ稽まりく此曲折をつけられけるハ日數のぐあひ
もあるべきけれどあまり〳〵て十分ハひきそぼ
つてきつてさふを矢一はゞ羽ひぎきるくふな
ごとくひきはなそつよくそのまゝえらよのぬ今
ちらへせられその口ぎしきりやあんまひ関をまもる
めよまるみもろえずるのできあんなてるどうしと
近あてをほうせぞ千住をとらく訳ゑ居がちんちあ
アてもつふの勇あらぬところさいそぎのぼ
ちらまでもつくせられしるせらさいのほどはやとちらん

みなふきもふかくておまちかね〳〵他さくあそびかのの
まんどよう一さんだいそのまゝまであるべきをかく
まうぐのみなふきをかつぎてくらんちまい〳〵
ちら〳〵ぐらん〳〵ぬふうふつてふ〳〵 ○ せんぐのてハまことにふ
きぞつのぬすてかんふくいふべき天窓よなさにほどある
それをうみびきあかしてちやうどかくのぬきのぬをふをせる
またふらよくふしぎる人あらんやもつきやる〳〵ハ馬の
るすけれどそのきしんふゑききあらしてきあいのほど
ハ秋三居さうつゞがそのふ言の若うとまさりて
ふらくぬきも大士乃めでたき花のかふの大せんさうも

おんしのせいぶんゑよのくざんバあるべからぬするなれど
どふらそうろふのいくさのままにあふらかズうくなれ
むしろ白桃内にあるせいぶいゑまのべきるまて
つんおしらるてあなひもうけぞ将のそぶ北馬の事ま
でんおなひようなぞてあるおるをかくのごとくのき
ぜうの女ちらみ人あくも妖こ信乃がらことちち
おしきうあるその根ハるへの女ちらみあれどおるも
いろめくその信乃がらこ又だいじの事こそゆしぎあ
つきぜんぐんのむさそび北訳言への女ちらみの意くたび
信乃がかの馬にのりて今るおれらびかの言のごとく

訳も原ものりんらいのほんいをふるそのみまでにまうつと
おもふきある二つのふしもさるをそのくへの北好みちらそみ
信乃そのすハふさでもどもそのことあれがそのすハあせる
にはじおもいる初シテ後シテ一馬をかくまで二好ま
せられしまことにしきぜうこ又そうてほのたふるとも
北女ちらみのらあれど同じく北女ちらみにあるぞとても
訳もはがらんあいのあつきところ将又とをしちるいの
女やしふどもまうと一つのおもふきあらんらかくのあく
峯るもふがあり谷もふぜいありておもむきひとところ
奇勝の風津流なるにこれを名くる人又あるべきやる

こゝにもろ〳〵馬の文までふれその外においては本編
そのうんちんのかくべつなるもの其一つもかぞふ
べくとおもへばおぼえていふもかんふくむひようにぞ
まつ河中にはさきなるみさごのめくそのことごとくを
みなごこくまでゆくをいふ龍と馬がえりほをとらひ
又せいがのえをとらひての事也二馬のたかめの地経とらふ
べくふへて十き百きんはぶふるまでは又えりほを
おもひをつるとはあるごともかくもほむべておもひきて
べしおもいてめくのくるしせんよあればえりほを上
とは法見おたとうおもえるとどさまも印あるもの

馬のなかれしはふるくよりしまるをおもひあるを今せい
がいたのみさごとよくみなふかくえずつのこ本りんをやう
とらひ龍馬が其をかんまうやうの言ふすやうやまそそり
ほのおもひをたちまちころれよさんずていさましく
せいがいてはおめ花をつるもたえてふさぎしおまよ
此馬のぬしを手に入ゆきたらし信力がせつなしそふなるふ
そのやんそくア、名馬といへども馬のうちとほいひそきおもひ
もありしろがてまおもへばるべまでおもひよべきいんある
思えひくがまるくひかやて年々もしおのんのあるよ
あしぞばおめぐぞくよひろきんやけころさそくかみ

こころをうけてあそばせとおもえあてそのもやういよく
めし然きどくなるんでぶふ代明ハもちろんまべてみぶ
むいさみりんこととるしふきみぶやるへいまことよるこ
つぼうたるもるあつくの句あるらふ　かの雪中の
老馬をおもひよせてせいぶいたおゆくてまうさんよるす
然みいまぶ叙扂そのらいもききまではふうくおもひる
らすぞくるあぶミとのひ然馬の化よるまべきまある
じとハまづおもひもまづしくハそとくしる馬なと
ばそれはまろせんまたぶるあらじよおもむしふかぐく
これ叙扂そく智そくぶんおもろく猿くみるその文

ゆえまおもろし　代明のこそあれ紀三六以下寒
水はなほ又てもあくてうよくうきこてまる神やくのき
そし人魚のあぶくと一つハ又ハこえもんの女めいよく
ぶぎいをぶしこれハふきいもんみよのしよくおよぐ
ついちも又おめくそのぞしよあり水馬のりんつる
までるてえみさごふしりんまあんそくしるちろんと
ところへ又おもひもきぬかそぞくの五三十人もまろろ
べきさぞとハおもえるど化すの又こてよあうてさる
るげをふきあるそとまづチヨトろのもいぐるいのる
こ代明と紀三六おもをそぞむるいきんくしろの三心

とりじく一時にて衰ふじよの意さだかならぬ武士ぞう
なりにかりをあふにてきたりまた何事のおぼへたづねを
きゞこるもちゐしぜんのよろこびに ○ めぬ太郎が
そくぜいに證據せいざいてみらくまきをあらひは
ころのふぐふせる きつもハもとより犬きらがいていぞう
しんおのく其義のたがえざるあつましところもた
ぜんにるをあり犬傍か犬飼かと二人にいふところあぢ
きひふくりり目をあそびるべし 此馬よんべぬきを手いれ
ぞばこそ さらあうが馬も似よらふ 出す事ハことまい
しうりてハ諸見ありとみゆふちらおまふ事にハあらなんど

文面においてハ狂じろいの言もあらざりしてハ文面を
ふしぎなく狂その娘のことをも言たるべきなるべし
あそびをさだむるほどまでところにあめて河より
よりとつるべしおまいつるおかしくとたびひろめて
まことにハあくざるまでとくし馬なりく ○ 親三郎が
主人をたすけおほくりめぬ太郎かいそでで此てをみのぐ
そくをとりもちひんするちやうじきまつぶふく親三郎も
ゆふなるぶんとりハせんぶとこのあうひとてさしもふぎ
のるをとハせぞて似ざてあくんにハまことにころゐをもちや
ごじよのつがふとききもすあらんをめぬ太郎がそこをまて

秋菊が云にあづま猿つぎはゐるのをもてめぬ丸郎が
ぬそ人らんぎよしとしてそのあくゐのあつたまりぐさ
きのきてしとやりかの毛ちやしどのつぶをかつもざる
のきあつぞ猿それをもごとくめぬ丸郎がとこ人の
まやしまさしてかもてるかのぶんよりのるこそでは
あつびとありてそそめらまさへありてあるなれバそを今
あぶちはいやしめらまもあつざらあれどそれ又その
しふそのもやらもよるべきくこときぐそくをたぎ
とるぶのむざん云むもつなるのこざハらろそあまも大士
のせざるをころ又今ちやしどよきつぶなれどさら

云ぶつぶハらうそあまり著翁のかもとざるところその正
正ららの意をかくてはあつべきみなやうまでおすろ
くあやまりおろうすやあつんあすろうしくかんすえくし
木ろげは人ありてよびとめかのうちあつきれろる志
どの又おまおるまらくチヨツトいぐるのこ残きしや
五郎ぶんみ郎ちとより里又はいあるもののどもなれバ
歌をばとよりてはいづれもかまそうてつみをうびある
ぐふまであるべきなれどめぬ丸郎をさそゆしたま
ひしまでとまでおまをそころのつらでまもや
まらふくぐあひよ猿右いづれもとハおまふまの

もしめぬれ所をこえしかうんよハうれしもおそれてまづ
此むハまづのくべし此すみどころよく又あるかりぶぞく
を孫ぶりて馬のみかへぞゆるふきくま形をゆるう
形又ろれぞちやしどさいたびのぐるくをゆてつぼ
さへゆくりましまげのきかバられてみかゆくろをを
し仁ハ誤ゑ府が女ちま人などさるまても仁の徳も
はましさしも女のうふ此あくりのるハきつき参し
此大せんちしの小まぞりてさしも大まぞのるかきも
あるざるどかくるとこふあそびもすやすもありて
一するとてかりそめの居きぶぐしあらるるのあるざる

ハせのさい筆をも好筆とていふべきやうもあらぬぞかし
きうやまどんみがたちぞしやうんのみなとのえくをつゝ
まへとあひてかし所武士らもせいじやありてさぶやも
かの二人まろびしるの二女きこふどてきしてこふめい
をおそしせい此二人ハこそ小親王府の功をわすれずして
家の程どの是いあるべし本傳ふしてせいじやの名ハ
うさハ女ぞろんまて家まかのぞや二人がふかのがいとをふ
さあればこそまぜい二人がふかのたらけをあるそ家まも
いつごとく小ぞちもいろく於すふきのあらざるをそし
ておひどもあんやふりてそくじまいえぐるまであいらい

せんやくようろふで足とく おぼとぞ やぶとぞ あま
たのまじめらつがめよきせしその用もそへけてろとし
ききみハもちろんめしもそくたしへバ一さじのおと水
車のぶんぐめぐりてうくるがめし ぬ用とぬ用し
つきておよつべきをおとせるもありそそでほまあせん
やくらしふきるさぞて歌辰が言まそそとあれバさくま
みらふもおよぞのどうれハまんちくのさうちあらバ死病
あれバあらんせんやくを十おまハ昏るあどそのおよ用心
あるところ著名の筆とかのまえのちやとしるてもと
ふちがきぞやけいまやぶらあくるもちん人のちんぞよあって

そやいせるそのそのハせんやくふうでぼんやくまハあるそ
なれどせんぞよそそのるなれバそのたきくるところそ
せんやくハ同じ大きそせいしなどめいらんつぼくる
ハ殺せるも二十人ぞうあろてそのるそのまへハ神ととあ
あるかどめさとしてあるるハ同じらずんどもまごあハ
てそつ医のめのそつまうまことさるかの馬さりて
め馬すてろのふるきいんさへあるなれバせんやくのきい
そきが於いてきいあるところそつかで一さるまであは
てハかしさきせんやくそのよろてまでハきてめろく
まてまそでとあろ文ぶんせやんのたとびもあれど

於ゐとゑんにありての筆ハあくぬかともおまえみて
ゑんやくのせいめいよりぬめぬ丸命ハもちひ
ざるその理まさしくしてくつてざひこたびつゝ
ハまことにこうかアいふらいふくゑんゑん見ことゞあ
てらべきだいじめるへくゑんちやう文字のぬ好筆え
ごとでふれどおすろいこところへあをもちゑんで
かくえてろくゑんちやうかふくらうまでみしかそぞるの
あすころきよさて於文きのぶやそくをらゑんめぬれが
ゑんやくはもれにハらてて叙意ぶたをゆくろあそんた
のごとくもちゑんまで於そのぬまみえんまでしやむまで

きのあくぶつゆゑゑんやくこやつめが口ハらくざらと
ころえこれしぜんゑんやくのきいめとともらぶべきふんろ
○ぐそくのるまへもいへば又らふべくあるでいやふして
もぬふるらふかのぶんどらのるハ叙意ぶ言ばりまでも
着物の筆さセられまずきるハ千方セしそハきれど
なぶんものみのことぞあほしそのまハちやうどのつぶ
あるまとごてゆるをしくおすそることろにあるあを
チヤことろて於よしい二人がは悉しろそばふ叙意ぶが
言のごとく法ぜいのよぶんあるを皆の周まうりそち
ひんるあまりまへことはさがたあふくてぐんちのぐさい

ぶんみやう人をそんじさせまじき用心のぐなり
かのふせいの中のにかなへるせいくのものをとりちとみ
さりとてハまあしきてめうくみすろうざんやかん
しんせざんやろうきくしきあらくかりさててもくせ
ゆくすゑのちよ用のあるのあるやあらんおよかゝ
くるの事がらくよその利ありよるあるとあれバそのむ
まびもあるあるべしさてハ大と小とつねにあべきにハもと
よりあるとかりくるのせん事や奇ありて又生寄も
チヨツとをひとのふらんハめづらしくるべしまづさある
ことたかつぐがるよ長がいありせるよかくさとある

これめさこそのついでふくべきもつてよふくるびやせいぐそ
うゆくてをまうまるの言あくやでゆく馬の花をそ
へらおくるおすろきのころふくぎ出馬のうちきさをそう
ゆてハいふしさまざまべきのこところえたろつぐよ老さや
ぶくんたありふふ三ありてうんそをてきらそのさぞて
小ろ人数疾は老實代罕ふあり紀三いきくんたあり
きしやみぐんみうろあみさくぞてセハ十人くよおすひび付
らそくいえんたらをひきみおそくろろれふらよきをやろう
をもてぶくひきうろつい一えてめさまいとふおすろし
○たかつぐ武家のまなべまさろとろとくみげたるまき

東国三のまきにをはるへきにけつせざるとあるにふごかく
のあらまし似せばつハすなはち里見にありたるぐあら
ざるきへよみものてきなきまでまあやふきことをそろへ
たるぐすくるそのあやふきを古くるひ一人当千ともいげなる
たるとふせぎあへて天ふくのいろハ在りいへどもいげなる
又文みきみなおそるくるふるまり何の奴婢きくまん
の勇士まうそうあり一人当千のたろつぐとれんま
かちぐくしかもさくふせぐのをそはつひるふせぎ給ふ
ふおよぶべきかたえのいきほひえよみちあやふくアハヤ
とおもふところへふしぎの二まきたるくでの花うちぐくやぶれ

んとするところへ花まさに一まき敦盛の花ちりかゝりてそのまゝ
てきをやぶるハいよく花ちやぶるハ敦盛の花ふせぐてん
たゝかひの花ふせぐさんハやぶるふじやぶるまんハふせぎ
ぐしさ一ほし女ちゝ今の花をめでくもつみぬらんとる
ふさハいへふせぐよやぶるにその花のけいちゝんハおのづから
ありてそのそうりめぐるひなしるいこゝろざしてちぶさてあれど
女ふぶきのてる一此の二人をもやいとあそびみなあやうく
此二人のげとさゝのみゝ又一ぶさあんじんのやけるきみ
もあるまのさぶみじのそゝくよりあそびまう二人からん
ふるくかたまきに八犬士まふび里見ゆかりの正木なれバ

うちふ太きめたんちそあうこゑハ敵王将ほつくのうちふ
のやまみなきたハ一ト手なかひよりちよりそくむ
のふしハ仕方とひきよせてうゑうやあらん之矢く
○しあらげ二二十五番のうびんすておやまおとこぬ
きやしゆう二王ふるそこのふ方えうきよしみそ
のついをおさめてあふんハふまでこそ将攻輯よ
用あるまであべきとハやくえうるるもあり王し
まへのりんをちがびくも王をぞしあらげが勇め花子
一やりのてぜしやくハ乃ろ寺さしあしあるべきまこうる
まーがあくろくハてるふかるてるのひぎきある思

うち又本陣ハいづれもちかんそくめいせいめい古の美女
はやりの名将そのりんをまぬかれぬ仕まもやよやりさ
きよまさらしがのをみてのそくめいとあてそあふそがし
○敵王将ハもちろんみなふ飛香のごときえんやてのろ
そうみてふてくへてちよしゆくるひて名のとうかえで
おとあひてるしてりよくいさみし同ドうべきハもとよ
ゑかれど将その方からそふてあるるふ○先陣後
陣たる本あのし兵をほくろりんさぞうしくまへは
たかつぐかさくるはも今敵王将がうちちてさてもよ
いふまですきなげ王をたらひおりそざふどみてまきて

同え子細なきにもてびんほどいかゞなるかあるらんと
ゑおもしろげなるによつてぞ、しく字ともいつきみて
紙上にむかひて、こゑの声をあげて、よみあげきゝて
ちゝきなり ○今一巻六巻まてこそといへども
あるなれど五巻を御ふみと又若衆のこゝろまあ
るべし。そびの本には六巻を付けるも御の五巻まで
のことのみあそびこゝろ又例の御すゝめしことなけの上の句
まよひてるや、おしてるところにあそびあさくんやあほぐし
や下の句をそへてたるものゝ信力ぶおこゝろをもとをぶる
かのほうありてまきをまづりて印をゆづるとあるべし 歌集

あるふうんにハ今こハまへきものにてごさくきてるつくこ時
のるあれバ又あやふきにいへるてきくそへ、のるまさ
たびハあるべからじことまゐての歌集ぶいきほひたるる、
のあるあそぶくハおもてあそびを作しもたハやぶれともいへるを
狂歌やくてまき之おのてかゝるものゝものふるざこそし
といひぐさんかくそのあるあらしく信力ハかふ所
をてあるきを氏とたらひをありさらバ歌集にて
をかざりのあとにて紙まて又かふ所にたちさみ
いふる所ちくてあらへのるもあるんかにけうこゝろあ
言のもずびきみハまことあそびて若衆のせい事こゝろふ

同じ人でありながらびんほどいかゞなるかうつらんと
又おもむろにかやうにこそ〳〵しく字をはいきみて
紙上にむかひてつきみ声をあげ奉へまゐらせて
ちぎまなり ○今一巻六巻まで三とおもても
あるれど五巻を例ふると又善為のつるまあ
るべしそびの本と六巻を付ても例の五巻まで
のことのめづらしさ又例のおもしろしことふけの上の句
まよはするや、おもしろきところもあれどあるてんやあらじ
や下の句体にてなるゝ信力が三味線そむかぶる
かのほろありて手をかずうて功をゆづるもあるべし [illegible]

あゆふる人にはさこはまへもいでござるさでるはつこ時
のるあればみあやふきにいでるてそくそくてのるふさ
たびはあるべからじとこそての歌舞伎がいきほひまさる、
のるあるべくはおもてあそび伴しせたはやすともいへども
狂言をしてきこえおもてかるみのるのるかるまさるべし
ともいひぞこえんかなそのまあらそうて信力ハ今町
まそあきと藤氏とたゝかひてをありさらバ歌舞伎て
をやぶりのあるとて絵ありて又ら今町よたてまけ
いうろ恋をしてあらくのるもあるんかにほろそそあ
言のむすびまみはさあづる著為のむかし事にてふ

こみまちまちあんばいかのあらふきあらべの言までも
むさてをぞいでいおふあぶべしそのもとびかなかく
まいくさよたろうぐとしてろうぐさしといふもおりべにふかが
らいしをとこなりや菩薩の鬼神とふへでしたろうま
じきたんくめ薬をいうでおのゝがかさそしとどこま
たろうべりんやをとふるくしとやんところハ前條にも
いでる次輯たろうえんてさいふもとや道中にあり
それらも又らのこれ日數さぎえればいまハますやる
二三号のうくまあべし古のたんくめ薬とふつるて
とくごろのこゝろやくをえやうらいやくるもちや也

きよあうとおすべハうまくしくなのしくこそ

かんしんぶげんはあらこぞんのいくさぞのみとりそゑふ
つきそてかの唇のうへをもほでいえれさそるはりかの唇
のりんびをえらつきせられししてきんハう○て去あしを
ひそてあれど孫その孫んべげそこらんの脣（シヨ）のあらんるみこそ
孫ぐそしられそのみハあぞろくおくまづきしあくもう
此條よさぞふそもちこゝまいひあめくさのこさをせぎ
してきのてまよう（ま）ざるもちろんなかるみハかのらん
ぞのさあまりてあるかひまおのあらくさらへぢまろぐ

あぢえひきりもありきろ女ぎ〳〵てよ〳〵もぞろを
とゞりあれぞ冷きり〻あまでまもおよぶるゞどいく
さだまりてハきらことをえふち三要を女ぎやう
まつるずその眼のこゝろのとらへぞくびんよいそゆる
おぼえきこきとこるまづかんそまひるのいくさぞ
のこしちおとあるのまふるぞかのいひあらめぐぐるん
らひのさくい大まことをれバ女ぎやうべうぬハいふと
三要ハかしこま七ゆうみ代かんそげんみん大児
あまりあんぞてひそくのじんさひのいちどまつぞひつど
へるまおよぶ女のこし おのあらきしろおす人バいえんや

翁そのうまきこゝろをとりて女ぎやうれくるまでと
まづなきいふきところかやんとかやんと八犬おち
あふまでハそのまぢまうしちのむらこゞんいくさぞバ
そのまこしそのこゝろあ志両唇のこゝろを合されくる
こしちぜんびの蛇八犬作かくもバこゝにうつといえひつハ
ちのこゝをのそくてまつまてのことのこまて一ふりちいて
さぞをとまへのこゝちにおとあるとつくるまのあそんや
後世にいつるといふでうるあと二人の筆といふうべき
さて三本と女ぎやうあてらこれ文をのこにあふじし
ぐおるよ〳〵るこことふく女さきうるとるれとい人も何も

ことさらすなはちぐんこつぢごくこゝろにハすもちろんまで
かれはハさき仁義のらくきとらて一大ぶゝきとはて
そうそうへ御稗よりのらうくをあまさどむかしび
つゐぬれまい玉一くるんで光かゞやけるつゝ大ぐん
それの大ぐんぶ昼さそのこゑことぶところいそぢ
ちくしやう三をもまさりてせめくるしむべし
○さんぎ小せうを伴ざる五きんとあげられ
るまでとまあま評者のきんみそみなその病
あらでおよれうるみるむもき五禁とかぞへてあげ
らぬくるをきみるハつるすそめてなれどもるゝのきめし

まよりて出そくその穴さがしと結るてのさいそくも
ちらきさそうやまぬれくうそふそんをもとむると
それひよくるのらうまきのふくろのやまひきざし
くさあうみくうやしまおそろしきるひところよ
ひまうくるみちぢやハ狩のまよやみぐくし病と
そうつやみぢきハそのもとぐるんぐのやゑなれがたつ
とそすづべきるをへかし ○八犬傳の世るあるふせる
るすそふいそうしようも狩さらんそそもろ人のきそ
とうなれバ今そそことあくるしくらふまでうこそある
つきてまさへバかみ職代あまうるの九牛士そるよも

さるほどの富士あるてあれバそのせいのたかさる
人まれなり八大士八いちふゑていんえんありてう
翁の芽をゆていちのぼりて翁松つくめのうまでう
あるあぐる手く然昏とあまやんざいふまへの伝
うめいをうつえんてうまことに大きなさらにひまて
九年士をあそのとみふさこそうつやみおかふゑめ

然たびも下がきやぎてふれバまそうど伝き芽すの
ひよまそうど伝く一段のうち向ぶるのぐくかさね
アしるハさるまらいゑぞくどきのとまてそのいのきこ

えどさきもおほうのめべておかひあやぶまるれども
翁ちろごろゑいげんまてぎやくらんりんとしをたまは
あるもあつぎて人よよまやて一つてうきかるとい
さるぞて然後よくぐえらいるそしくかまとうぐき
するもあつぎてちかくもあつバ夜の日冬との衣をつかな
うちえまさぐううつみ火よあしさうのべあひてあ
一せまきあくおくあるくぎるもすやしさるもあんぎ
るもそのざぎうの一きやしまてみふたぎるめんがう
とはドろんといふかやん百里のべぞてあれバ筆よ
おさるよろしてはかるさしく伴めきしてるあそふう

ろしんかてもバよりませてきてたまふ翁ハもちろんかく
君ちゝをおのおの一所のきやうしまそろどほくまふ
くぐるるそてさてあうめでしたびいのきこえぬ
るところと称ぐそくハよろせてる人々ふへきひよま
せゑれておーそろきそうたぬちるんるとふして
こひのミやまふあん
篠齋
天保十二年丑二月八日
著作堂尭先生
玉案下

九輯下帙之中の批評中あやまりて條々又あくへき
のるどと称するさるしたまそろよろずの流ゐゑ
いまぶやさびあので芽ついでまうゐようやさ然
うろあくとありしたまへもバ又らうふくそうへやとて
あゆほくぞきこひの文中をぐまあつるもやあらん
そハつ又ゆるしたまえかんすとまづこひあきそやうし
五林亭をおくせうるすのけやらまことあげてまあし
ふうそりうら五條の中石塔ほあの子流さこし
まことよかんふくせうふと画面うるんむまうひてみ
はえんいまむつぎらしハ篠きいもとようふぐ

いふもほうかきこと今さらにふかくさんぎやうなり
○あまさきがさん太子にくみせられこれも
又ふかくはおなじくてたびの御夢中あまさきが二度
のそうしそのときおもひしハ同じくいとく侍りき
○大士に紋つきのめぐみふかうしそらひける
徳さとしはようてまろしのほどあてえぞ文かう
職原にハうらみねもあるべきまとあるまでいはく
うちてぞうしおのれおもへバ今職原抄をさゝげ
一へんよみしろのときまで江戸京ハいまだと行て見だ
武家の礼式などハ知らずつてゆうしまくハ公武

ともぞう用もかへるちなみバあのおもとへぞもやかくみ
るいはおくべきまるとハおなひなどいろぞべくまそさまぎ
まつるおうさるバかつまそうしうる公翁などのぞこそ
他の人ふうんにハところくもそうぞうしく○ほう
るかぞのるとあまさきが妻のえんあるるをいひし
をさとしのうえそよまれし人のまぎれもや有
そんほうかでハほきたのひがまのかんあまさきにハ
あるバそハとまれかくまれさ二るハたそがれがろう
に画のちへをいひくるまでぞ他し画ぐさも翁がうさ
じづあるまちなめでいひなてゆけバそのときハ翁もかへ

それ〳〵ことにおもしろけれどすべてのおもむきハ画工のしん
しゆのおもむきをいひたてんにはすぢ翁もすこぶるとうりん
たまへて一ぶんもあいらしとこゝろえつよき〳〵ハ評中の筆
のあやまりいちげまでもいひろうを出さんのけやうさ
なむとつよあげられてハさらふるいぐるしめひこく〳〵
○大角を上らくしはもよめそこもそれ文おのれが
やしろとハことたぐりをでゝもかあよいひあふく
此一字評よあらぞ論よあらぞかもちろん歌舞伎ハ
あらじ大角よやまはしといひくるよいよくあらぞ
ただ大角よふんぞ一人ぶちしろ花やくもぶふとかね

ぐらひはなつるよ上らくしハちやうど此人よまあさうろべ
きるすけれバ役づきもあくんらと御ひいき歌舞伎がこひ
ねらりその歌舞伎かつてきめつけてこれまでまで
又ささらのきうんとふもろ大角までハそのきあるべく
あらぞさればかやくらけつしてかへぐしかくとバことをや
りつきよくちらし大角よハつひよ一人ぶもちたる花役
そくてやむすやあらん幸ふ幸ハ稀市文かぎとくさあ
まて翁のいよまるもぐるきハあくまで気らてハあめなんど
かのをとるみたあのほのふさまでもかるらいひて その
ただぶよくと此ひらひよそふへしとうみふらバ大角まし

てかくなどあそびていふところはあくぞそれハ
かしこにはくどくいひあまれど ふ文なる思ふ文
草のうちぞりしらそのいとほうぞやありけんこそ
みにあんをしるて見よとこへいつてかうじをかうむ
まるハめのさく手紙なりふかう今案（ばいら
ざるかなもうそとして何うふそのいなるぞとらんを
かなもてハおのづからかのをうへまほしとふまれあ
うらべ一翁のうじそうようふん今一轉をまち
たるバなふなもらる一中にもあるあく赤山之高中の
ものさま雨（ヲツ）なりをまちそで四かなそこそのなやまうし

なるぞかのやくそくするときいそくさるは同じこと
ありてを今さらくいなれ ○ さて文ちやきやく
のうへありとかうじもおそれいりそろそのそうすること
こちやしめくかの評中にハ筆のゆきざるますておもひ
より外はなきぶれをおほくふうてうさんどちやう
のいもぎやくのらいもなとあるべくあるぞほまたの
ほにあよくどのするといひくるハなよくどのするいつてい
ねいせのさいふるにかしこにそのするのそまいハ文そこに
つぶのあるすそのところぐによつて さうやくに妙
あるうをいそんとしてたまぶれをまづ（てのひくる）

おあ人ハたそかれのうきがさてらしあやまりなる
○大士めしんが来るて酒からのるすあつらうして
そのむつまじくたのしうろんほどをおかあまう
酒のるすのたそがれ気のみち筆ぶれてけいぼう
のるすまでかきみぐらしちやーまもぎやくもある
されどおや人ハうそあるも要著を呼しいふす中
まよひごろの気よおよぶるハあやまてら今くみて
もろぶろよふし ○ せひがくそぶあ十僧のとら
あるてそうにそうしたいあるする地流子すしてくそ
きよしぶんはふよがまてさぎしうとたそぶれいひくる

それのみハいさきちやーのいのきまもあくぎそのよし
をいそんにハ又ことせてあらぬべし此一ちやーあるし
ゆるしほろくまでまうすてみぶそれとや見されりん
かもバ此一ちやーいとづつてふうら今にあいていたる
ゆるされを孫がふものそ ○ きゝへきとみづらゆるし
てらそをふくさうしたまそろてるすぞもさかりそ
此孫かんそんふぶんもあげられある五さんの第一承ほ
又さきもまたあまりたまてるすの中にせろうし弐子
昏を諸や子の伴をまいんぞとひくくるをともに
とりてまれにそろうのるすあるをそえおのてあそらぎ

たゞまぎるゝところをあげておもしろしといへど
よのつねのことしもあるなるを批評にはそれをとおも
ふとはこゝろえてふところのそでにてびのはさまし
とのひろぐたけのふくしてそのあやまちをある
ふるべくふくみびらかふべきなるにはあるざるぞおのれが
おすことはいそぎたゞすところもあるやなればえん
えとあるふのいふきもあるぞようてなすけめつ
ことをくりかぞくそのおすてるようをとこしくちんじや
してやみんとてあやまちがうつりひとおほふて今
さることをかまへていふはあるまじきたゞよりてある

るところをやくまへもやあるめくるゝ又於さるや
ぶりはようてあるげもまた又ざるずるもあるひはいひ
ぬけもきこえんところあんをみやしたまへと
まづそんぐこひあるくんずぶるの金李毛の諸老の
三国水滸を評しるきんちうは花をそへゆるの
好評をみづからの花をそらうぐさうやてみせ
ふりさるぞ本つ枝とこまふそのまほひあらびてかく
さし今批著の好は二書ともにえらべるとおのれ
三氏のまねはゆめもかなふべきするてもとらうさる
およびなきことをあらひもまねぶぞ批評までもの

中にハかの本よりていさゝかそのふみに似たるも有るに
ひとつハあるまじきもあるなどそれそれまぐれあたり
ちがお任のさがさハ中にもおもしろけれどさのミの
評判記のたぐひやらんまし さるおもしろけれ
をさぐらんとしてさくまハあらねどまへもやあるめく
むつかしや一せまさぬよろんずおもろしとめづる
ふしぎ大ふく小ふく又まゐるにハあのかあさん
うたさぐりたびてふるきにえらめそもちぶみ
ますとみぞろに居つらるて 法一興のため笑覧にいれ
りんきうをぬふゆゑそのあくありてほめられあやま

てるを考へてとなへておのれも興しためしみなとまん
ほめられてられしきかちろんなれバきこえてうまてう
ぬも又かちろんされどもふまんなどにあるべきまなは
らぬもまことかちろんさるゆゑのおほきはなそかさる
てそ加へ みそくみるほめらるゝやうしてろんとあふ
うろしもふろふらうハのせのなくに似たらんハおほき
うろにてあハ芽らせあつたまらぬいさうらるれ
ハうるほどらぬくいらゆうさらぬうすかけまゆくめう
うれおかそざるうもあるなどうつてやでそハうらそあるも
半安者を評するゆゑひそきこころもうしうろハ興あるも

たのしみもあくぬやらしそうく学者を揣評ハ
大夷の二卯踊を琴魚に私語やらがちぢめまて
史人咒えにいまんとてやしもあるざるらふそあところハ
足るすのいとに淺かりしらバかの五葉中の穴さ
がしをやしにちうくりきそのくち咒見えにいふを
やうにありしるをそのうつりの芽くやまでふほ
そをおうそるすのあほうりれをおひくの法さうし
をいるハ文まうハ尽るところもふうくなりてゆゑ
ぢすんぢうひにふじるらをざじすんどらいてふるすよ
ろさび法主あしあるめくらハまるほどあるバせん

ハいらぬ子法目ざありにありおのれもそれぐみ
ひつるしあほしてとさろいらぬ子のことふだとく
やをぞバ狂完さがしまろんせんさくもまぎあつぐ
ぢうに御俤のさるそげあらんかをおもてざるにあり
孫どそこがかの旧癖とみづろくゆるそのところは
るうころへしまでそそ昏いでざらしてハらつて尺ろ
かひしそそくおすにほどそそつくさざるやうおすう
そそとたらへいそんに文まへの食あのてるもぞらふハ
いやしがふれどももちうくおすひよふろてきま文
ぞれまでやらし人にいてそあるかし白あまり白あるす

いふまでもなしなのあまにとなくかくにとふく一トロ
さふようちやドウをいつてふぬぬあんだいとおげる
るハひとさるそのぬとせきさる外なし其のと
おろかなるあまにかれバフトさふてハまさしかつき
やしまみそそるもあるそとしあぞうてひ又れバかる
きまハあしぎて其の女のまおしざるあんぜいそてぐふと
きハるでふくてそふしじあまらんまハむみまふ
ろべしまそとまぬしとあぞそひはてつぐふく
さるあり又ひとつきがにのうへふしぎで女しれ外
のまふんまハるれをかくさぎられとあまさま

ふどしきべきのところふらんをまとしかくべつふるぬ
あんぜいさるまてつけのちがふてるおろふとかんぜ
おすふのところもありてそもとよう云ふる事
いふハらそゆるくでなんどとうかんざるのところハそれも
狂いたでハあくぬるちやり右のめくぬとかん
ざるハひとつなふぞそのかんざるところさまざ
さるを一トロまたびぬとのみいえんハぞくげんまふ
あることなし丸のとふらんろそしつ年なるかる
きまさしるあしざれバ丸のとまてかつきをらひ
光若しぬふしざるあらゝであほとうてまぬて

さりとてはたゞうるさくあつ(ざ日)どこさぞうかみ
くどきあぐりつゞきてはうたまのさんみさるさぞ
出来着もこりうがちう人ぞしてハ女中が妙ぞ
それがらくやあらん又それごろ殊に老人桂客とさふ
かうじんふくちうんとかざまへられて新孫ちつりん
ごしきふうふかくぞ拾評をとこふがしおうたまう
おのとごときのみぞうり評といへぞて見ておまつて
一奥あれぞすやあらん一奥ともおぼさんにハ二氏ふ
らびよおのとが華くせしやうごろよくさうておさ
まるうなそれが評意も大くさいあつかじめみさころ

にありてこれハかしこをよまこぶるべくなれハこ
を何とみてさんはどえうりおぼさのするなどもあ
べきとしさうをかのこちよう丸のことをいひさうんにハ
あやまちハあるなど然こびハこゝろとあてもみえざる
しまやとみえどころふくしおぼさんよしやさこひ
そんだあうとてもかよかくとあぞさひ見しをいひ
さうさ又まひのよとまいちやしもおほうくめど
まれよハほしきとてされバこそおすふまたざさざる
それと此奥にふる子もあらんくとかの孫よろふ妙孫
もし又そのつぎえ孫もく筆といとるのつひえを

おもえぞきらあんするも狂ろうごるに心一たい
をかきて覚えいつまでもたへでめのごとく完
さぐりをするにてまれにハあさくすゝめいく
らぞいふと思ひまわれやうのいもあるて完をおそ
に似たるもあらはさるゝど十に九たかのしまんじ
ろしてその好みをあそびにいかると殊ふのえ
をそのみてもあるべからずてやまぬかゝるをとかく
ぜんびをきらひてさびてきづといひあへひハある
そむきんして狂ごいとしてまくらとみてあれ
てハぞつにそのえんにしへざれど一言のつみを

まぎんするハうみんぞもちんじやせざしてハえあしき
ぬくしさてるれハるれまでをとやも狂哥ぞのてよく
おもんぞるれもおや又まちえりりこぞその冬とくぶんの
ほさとしあれるをもらしも外におもひあんをまる
のありしろしそそ先年 侠客伝の趣向中や
さぐしるするのありしにつきいましの欲をかし人の
ぞとふどのぶとたとへそあまれしるするのぞろにそ
るのありしるえ 拙作の七手を遠升が数につん
せにつるそしとその人評してかこしるその中
におのとをほめそりてそくいのところとほめるし

しるハさそぶよかのそのきんよくつえてをろふとほつえ
まれ又ふんもあるぞとおもふあるろをふべぞう
しるハいふるそいふふんときいまでよめあそび
あるさるハその人々ぶでの人あるぞがくりんよみ
ころを業としてい人もおほくあつてつるはおかれ
かろくつみるの人なるぞ絵んまいハまたぐひあるゆ
ゑそる己ぶのおきふさびてかくのめしるれによつて
おりへがそ翁とおのも絵んものをいふまでぞくる
はおいていくぞくのたぐひふるんや文事ぶどいえ
んもいとをこふれどおのれようの絵ようよ小説を

のぞきみてするところめるまでうてさるきぞ一ゑくも
筆とりつてろるもあるぞてろんぞやくむその要
著を評しかみくぞきしつそぬ便をするふどいえ
んるまことにぶんを急ぐざるのたふそびしきかの
おのもがきいふよりになびくてづつよバ翁のもとつ玉
よしいく百ぞいふるんと今さるざんぎにしへぞ
かのさぶきそれふるで外に究をもとめてそろし
ときるをもまおるようて沈そびの評からそうして
つちみかくべくおよふにつきつてちむハあるうまへふ
まどうちえもそとあふぎころへも足かしてまろ

なるゆへしそれハちとききぐるしうてきしのもんぜん
ありまじきことよみをひしよ本路のいくさぞこと
ごとくなあしまでのこえをふるまひてそとかミ
ひんをむかふるぞりなバいさらくくろうの筆も
ふくところをみて又きひのかくそくもありとう
くりかへし因果よせじつんあさぞ失れせハあらあら
孫どかぶりてきよれをつくろへるすハみそしこハ序一
覧まてあるべし 此中荘今小文会のたびみれ
んぜやしをさこしぐつあどやしハふとにがさて
べりしまてこゆるしを孫ぐなれど信ゆがぐんぎを

きくまぎ程ハがてきそともどころの二段をらひころハ
ぎつはせりんへむかひていひぐるまてあへて他よたく
てあろうつてそよあへぞてそえかのところよまとひの
せくらひあるあしみのそのきそれハ狂なつてこちら
ろんこさハあれこれのすとらへども狂てしむべき
るすなれども今一ぺんせらしよとさてそふくんさよハのぞく
べきなれどもそけのあぶらかきぞなしのまゝなあぞ
いふせんきのすきまふしてたまえるべし外よ二
るぞくりせんつとよきハおもひはぐきするあるやなあど
ぞそつきみてやさあくしあふかしこく

吉田のこのすあかつきて おのれそのこゝろをふかる
しあらんとてふかくいましめさゝしたまひつゝる
これまことよゆしきのあつきところ千ばんの
ゆへよりけんありがたきまでかたじけなく太ぶく
せりおのれかゝぞくのみなあつてかたらずとあざ
きられ候げんのさが思え ふゑんゆへよそくら
ろてるハまつくなれども吉田のこゝとのごとき
いハもとよりあつかふバさるべき人まうとおもへる
るすハうれまであつかるやうしきんどおのれがそなる
まてありへまそハそのぎをうけてあるまやあらん

そのありさてハとまれかくまれ今ことよりげんをゆるふ
みのちをおなひつゝしまではあるべからず そらふよ
ありしあきて七くてそてるよすあるまじ候あらで
いよいよこゝろあるまふかくみなこゝろやさしく
おぼしたまふべし おのちんぞやとてもあへて
いさゝかも言をかざるのこゝろげんまあらぬハもちろん
なれどもたとひやまハあくで筆をそてやなれバ文を
かざるとまハあるべきをまぬぶるひそりてかるひまふ
るそてぞくい拙ゆうげまぞくしてきうへきのかさのさを
忘くのるるもほるんかるれハ文そなとて かくぐるなる

一若君さまこそかくろくげんよりげんろくさくはうが
らくらくじゆふしのたまふめく御んまひのつうぞ
あるんはハらへあまたちらこみと十五らしてござんの
たらうとせんまろハあみださまことらつそんしゆし
一若君さまも千代萬代のながきと
ごさてぞめでたきすじなりけり